

「生き地獄でした」

桂川町在住 Cさん夫妻の体験談

軍都として賑わっていた広島

一九四五（昭和20年）、当時私は、広島（兵器省）（各地で生産された兵器を集め、各戦地へ振り分け送り出す仕事）での任務についており、妻はそこで事務員をしていました。

当時の広島は、軍港などをはじめ、多くの軍の施設があり、軍都として大変賑わい、人口も26万人近くいたのではないでしょう。市内には、映画館や歌舞伎小屋もあり、内容は戦意を盛りたてるような内容でしたが、何度か行った記憶があります。また、軍にいたのでまったく食料が無く食べられないといったことは無かったですね。ただし、やはり配給の芋、かぼちやなどが主で、めったに手に入らないお米は「銀飯」といって大変なご馳走でした。

夫と違って、軍属（軍に雇われて働く民間人）として働いていた私は、毎日家から職場へ通勤し、食べ物も、着る物もなかなか手に入らなかったことが記憶に残っています。また、戦争終末期には、鉄などの金属資源不足を補うため、家にある金

目のものを供出させられ、父が仏壇の鐘や金属製の花瓶を出していた記憶があります。

一九四五年八月六日の朝

広島に原爆が落とされた日の朝は、いつもと変わらない蒸し暑い夏の朝でした。いつもどおり通勤、いつもどおり兵器省内の広場で朝礼。ただ違ったことは、その後、各持ち場に戻る途中空を見上げるとそこにキラキラ光る大きな飛行機が飛んでいたことでした。「なんてキラキラした銀色のきれいな飛行機だろ」と思ったのを記憶しています。そして・・・

「ピカッ・ドン！」

雷が落ちた時とも違って、なんというか、まさに「ピカッ・ドン！」でした。爆心地から2.7kmのところの兵器省内にいた私たちが、が「ドン！」で建物ガラスは全て粉々に砕け散り、鉄の扉は折れ曲がり、建物内のたんすや引き出しも全部開き、倒れ、私たちも吹き飛ばされています。その瞬間は、本当に何

が起こったのかまったく想像もつきませんでした。

数時間後、街のいたるところで火災が起こっている中、習字で使う墨汁のような真っ黒な雨がパラパラと降ってきたのをはつきり覚えていました。

そこは、生き地獄でした

軍の命令で、市街地の被爆者の救助に向かった私たちが目にした光景は、真っ黒に焼け爛れた皮膚や衣服を引きずり、水を求めて川べりに集まる人々の光景でした。水際や、川の中には、同じように水を求めて力尽きたのか、多くの方が亡くなっていました。

全身に大火傷をおった人々をトラックへと運んでいる最中、乳飲み子を抱いた母親を発見しました。赤子は母親がかばったのか、大きな火傷やケガは無く、ただただ泣くばかりでした。母親は全身に大火傷を負い、意識も無い状態でしたが、子の泣き声に胸へと子を抱え上げる仕事をしていたのが、今でもはつきりと記憶に残っています。

当然病院も、医師も、薬も満足になく、郊外の大きな建物の床に寝かすだけの作業でした。あの母子がその後どうなったのかもわかりません。

恒久平和と核兵器の廃絶を

一九四五年八月九日、長崎にも核爆弾が落とされ、盧溝橋事件（一九三七年）に端を発し始まり、多くの命が犠牲となり、生き地獄さながらの悲惨極まりない戦争は、一九四五年八月十五日、日本がポツダム宣言を受諾して終りました。

あの戦争を体験した私たちが皆さんに伝えたいのは、ただ一つ。「戦争は、やってはいけません。世界が話し合って平和に暮らしてゆける事を望んでやみません。」



●長崎平和公園 折鶴の塔